

高松の夏は、芸術文化が似合う季節です。

昨年、海の日（7月19日）から始まった現代アートの祭典「瀬戸内国際芸術祭2010」では、最高気温の記録を更新するような酷暑が続くなか、都会から多くの若者が会場となった高松港周辺と直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島の7つの島々を訪れました。10月31日までの開催期間中、当初予想の3倍以上の約94万人もの入場者を集め、大盛況に終わった芸術祭でした。アンケート調査によると、来場者の内訳は、女性が7割、10代から30代までが7割、香川県外から来た人が7割で、高松の街中でも歩いて



に見えたほどでした。

この芸術祭は、20数年前から始まった直島の現代アートによる地域おこしをモデルとして、それを周辺の島々に広げ、「海の復権」と「地域活性化」を目的に開催されました。来場した若者たちの多くは、美しい瀬戸内海に浮かぶ島に船で渡るといふ、非日常的な時間、

芸術の夏

—大西 秀人—

す。男木島では、この5月、芸術祭で結婚を決意した静岡県在住のカップルが結婚式を挙げました。人口2000人弱の男木島での結婚式は32年ぶりとのことでした。

芸術祭は、2013年に再び開催されることになっています。その合間の年となる今年の夏も、島々の継続作品を公開し、イベント等を行う「ART SETOUCHI夏」が開かれています。また、高松

空間に癒され、ときめきながら、現代アートを鑑賞し、あわせて海を知り、島を知り、人を知り、文化を知ることを楽しんでいるようでした。そして、何よりも若者との交流により島のおじいちゃん、おばあちゃんが喜んでいました。

終了後もエピソードは続きます。高松の熱い芸術の夏が繰り返されています。

（高松市長）